

パソコンの昔のデータから探し物をしていたところ、「ローマ通信」というタイトルが目に入った。あまりにも懐かしく、探し物そっちのけで読んでみた。

私は、平成11年度（1999年度）から平成13年度（2001年度）までの3年間、イタリア共和国、ローマ日本人学校に文部科学省在外教育施設派遣教員として勤務していた。その間、月に一度のペースで、日本に向けて「ローマ通信 Ciao Ciao」なるものを送っていた。あの頃、メールは使えたのだが、あえて国際郵便（航空便）を使い、封筒にイタリアの切手を貼り、紙媒体で送っていた。郵送料が心配になるが、何と通常の封書と変わらなかった。日本円で60円ほどである。

以下は、1999年6月28日付けの「ローマ通信 Ciao Ciao 定期便 002便」の原稿の一部である。

ナカタ ナカタ

4月9日（金）に第1回職員会議がありました。さすがに緊張して会に臨みました。自分の机の上にある配布資料を確認していると「サッカー交流」というタイトルが目に入ってきました。さすがはイタリアにある日本人学校、サッカーで現地の学校と交流しているのだなと感心していました。

ところが、よく読んでいくとサッカーをやるのは子どもたちではなくて私たち教員だということがわかってきました。隣のF先生にお聞きすると、今年度から始まった行事だということ。教員の中には、サッカー部出身者はだれもいないということもわかりました。そんな素人チームがサッカーの本場イタリアの大人たちと一緒にサッカーの試合をするとは、あまりにも無謀としかいいようがありません。

ローマ日本人学校では、ローマの私立小学校である「コケッティ小学校」と様々な国際交流を行っています。そのコケッティ小学校の保護者チーム同士のリーグ戦にローマ日本人学校教員チームも参加させてもらうというものでした。

まずは格好からと、スポーツ店に行ってサッカーシューズとソックスを購入しました。そして、試合前日にはさすがにみんなで練習をしました。しかし、これが失敗。ミニゲームなどといって始めたのはいいのですが、長い時間やりすぎて次の日、試合当日にはみんな筋肉痛になっていました。

いよいよ試合当日、みんな緊張して指定された試合会場に行ってみると、「ナカタ」「ナカタ」の声。イタリア人が我々を見て「ナカタ」と呼ぶのです。こんなにもペルージャの中田英寿選手の名前が浸透しているのかと改めて感心させられました。それだけイタリアではサッカーに対する関心が高いということです。

ローマ日本人学校教員チームが緊張する中、キックオフの笛が鳴りました。とにかく精一杯動き回っていると、前半終了のホイッスル。意外にも0-1のスコア。「思っていたよりも強くない。これはいける」と勘違いをして後半開始のホイッスル。勝とうなどと思ったのが大間違い。スタミナ切れとともに0-4と離されてしまいました。何とか1点を入れて一矢を報いたいと思っていたところ、偶然入ってしまったようなゴール。みんなで大喜び。

結局1-4で敗れましたが、それなりの手応えと満足感と極度の疲労感とともに、次のゲームでのひそかな勝利を誓い合い解散しました。

全部で3試合行い、結果は0勝3敗でしたが、思っていたよりも試合にはなりました。我々もさすがに学習して試合のたびにパスが通るようになり、フォーメーションができてきたりして、いつも前半は五分五分なのですが、終わってみると負けていました。分析してみると、我々の体力不足と向こうのチームの後半の目つきの違いが敗因だとわかりました。「技術ではそれほどの差はない」という結論にいたりしました。

やる前はとても不安でしたが、終わってみるとさすがに充実感が残りました。そしてみんなで「秋のリーグ戦はないのかな」などと話していました。

私にとっては、新しい職場へ溶け込むこととイタリアという国を理解することに大きな貢献をしてくれたサッカーの試合でした。ちなみに、ローマにはいたるところにサッカーコートがあります。それも透水性の人工芝コートです。そして、平日でもナイターでミニゲームを楽しんでいます。我々の試合でも雨が降っていたときがありましたが、「今日は中止だろう」などと甘い考えをして会場に行ってみると、予想に反して試合決行でした。さすがはイタリア。